バリ島の伝統的呪医「バリアン」の諸類型と診療技法

菱山 宏輔[*1]・コマン ナスチャ アンガライニ[*2]

Categories and Medical Treatments of Traditional Healer Balian in Bali

HISHIYAMA, Kosuke and Komang Nastya Anggaraini

要旨：本稿は、バリ島における28人の伝統的呪医「バリアン」へのインタビュー調査をもとに、バリアンになったきっかけ、その診療手法の特徴、診療のために用いる道具と用法、古文書（ロンタル）の参照を主要項目として、バリアンの特徴を明らかにするものである。そこから、先行研究におけるバリアンの類型と、道具とその用法における「媒介」としての特徴を実証する。同時に、そのような特徴がバリアンの役割を説明するうえで有効な観点であることについて論じる。それらの作業をとおして、バリアンの特徴を論じるうえでは、超自然力を扱う者という一般的理解だけでなく、媒介者としての側面が重要であることが明らかとなる[1)]。
キーワード：バリ島、バリアン、呪医師、伝統医療、古文書、ロンタル

1. はじめに

1960年代以降、補完医療や代替医療についての関心が高まってきた（Gureje 2015 : 169）。その後、心理的な健康の問題に対処するうえで、伝統的ヒーラーの利用可能性に関心が集まり、心の病を「医療化 medicalization」することで、単一の、包括的な健康ケアシステム（健康保険制度等）のなかに取り込もうとする試みがみられた（Salan et al. 1983）。近年では、健康や医療の問題がいっそう多様になるなかで、効果的なケアを提供しようとする臨床医学者は、世界の様々な伝統医療に対してより実践的な関心をもつに至っている（Kirmayer 2004 : 33）。

このような状況において、改めて、伝統医療とは何かを考えてみる意義がある。WHO の定義では、「異なる諸文化に土着であるような、経験にもとづく」、「長い歴史をもつ」ものとされるが、ここで「土着」「長い歴史」の意味は明確ではなく、非常に広範囲で異種混交的な治療法を含むことになる（Nortje et al. 2016）。研究者は、伝統医療に携わる「呪医」がもつ共通性に着目することで、その特徴を明らかにしてきた。例えば、ローカルな文化に根付く知識、信念、実践を利用しながら患者と共通の観点を共有し、「病気や苦悩に対して、スピリチュアルな、魔術的、あるいは宗教的な説明に訴えるようなヒーラー」と定義される（Nortje et al. 2016）。診療においては、儀礼、メタファー、意味が重要な役割をもつ（Kirmayer 2004）。そのような儀礼と儀式は、治療システムにおける呪医の権威のなかで、患者の期待と信念を増大させることで、効果的な結果を促進する（Csordas 1988）。さらに、そのような象徴的治療の儀式は、カタルシスや認知的再構築、家族構造の変容、コミュニティのアイデンティティの修復、社会的結束の修復まで、多くのレベルで作動する（Nortje et al. 2016 : 154）。そのために呪医は、診療において柔軟性や応用力をもちあわせ、心理セラピストのように症状に依拠した標準的な処置を適用するよりも、自分のアプローチを患者の問題のニュアンスに合わせたり、調整しようとする（Nortje et al. 2016 : 166）。

2. インドネシアとバリ島の伝統医療

インドネシアにおける伝統的医療もまた、長い歴史のなかで文化の一部として存在してきた（Liem et al. 2017）。そこでは、土着の医療知識がきわめて広範囲に分布し、ローカルな文化の多様性に依拠している点が特徴である（Whitten et al. 1996, Leurs 2010）。診療のスタイル、技術は地域ごとに異なり、同じ村の呪医によってさえ異なる（Salan et al. 1983, Gureje et al. 2015）。その背景は、オランダ植民地政府の統治下において導入された国際的かつ生物医学的な知識、マレーシア文化、中国文化、ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教など

受稿日2020年12月１日　受理日2020年12月15日
＊1　専修大学人間科学部教授
＊2　近畿大学総合文化研究科卒

の要素の混交にある（Salan et al. 1983 : 378–379）。

バリ島の呪医「バリアン」（Balian）にも、一般的に論じられる呪医と同様の特徴が見出される。より具体的にその技術に着目すると、パーソナリスティックとナチュラリスティックな医療体系の峻別、体液性免疫理論における熱／冷の区別等である。さらに、バリ島文化に依拠した多様性という点では、そのような二項対立図式がいっそう深化したものとして共有されている。それは例えば、ブアナ・アリット（Buana Alit ：人間の体、人間の世界）とブアナ・アグン（Bhuana Agung ：大宇宙）、スカラ（Sekala：目に見える世界）とニスカラ（Niskala：目に見えない世界）などのカテゴリー形成である。さらに、カンダ・ンパ（Kanda Mpat：生まれてから死ぬまでの四人の兄弟の霊魂）やトリ・サクテイ（Tri Sakti：神の三つの役割）など、ヒンドゥー教のコスモロジーを成す宗教的観点から、健康と病気の説明モデルを強調するというように、文化的・宗教的特殊性をもつ（Lemelson 2004, Ruddick 1986, Jensenand Suryani 1992, Thong 1993, Hobart 1997, Lansing 1995）。

それらは、バランスと調和、秩序と障害、適切な空間―時間についての考え方に結びつき、浄／不浄というような規範意識、建物の構造・向き、体組織・身体構造についての考え方として具体化される。暦の概念も、健康／病気の傾向、性格づけというような側面と密接に関係する。さらに、社会階層の評価や社会関係の方向づけにも関わるものである。このように、バリ島の伝統医療を構成する理念体系は、文化宗教モデルから、時間・空間、社会の編成原理にまで広がるものである。

こうした背景をふまえ、バリアンのより一般的な特徴について、F・イースマン（Eiseman Jr. 1989 : 第14章）とL・コナー（Connor 1982）の研究をもとに明らかにしておこう。F・イースマンによれば、バリアンはほとんどの場合に治療を行うが、同時にきわめて多くのことに携わるため、「シャマン」（インドネシア語の表現では「ドゥクン」）とみなすことができる。そのため、ヒーラーとしての特徴よりも、バリアンの職務において、スピリチュアリズムが果たす役割に注目すべきであるという。その力は今ここを超える超自然的な世界（存在のniskalaの段階）のなかに入り込む能力を持ち合わせているという事実に依拠している。

L・コナー（Connor 1982 : 265）は、バリアンの能力の源泉について次のように論じる。バリアンは対人スキルに秀でるとともに、人間と超自然との間の媒介という役割に依拠しながら診断を行うことで、日々の文脈ではほとんど再現できないような方法で情報を行き来させ、患者の感情的浄化を促進する。バリアンは、患者の直接的な制御をこえる超自然的な諸力を参照することによって、病気の物的次元と精神的次元を緊密に統合する（Connor 1982 : 252）。バリアンとクライアントの接触が長時間あるいは回帰的なものである場合、関係者の社会的相互作用において問題のあるパターンを再構築することにも役立つ（Connor 1982 : 265）。

3. バリアンの類型と本稿の着眼点

3.1 バリアンの類型

ここでは、上記のような特徴が具体化されるバリアンの諸類型について整理するとともに、本稿の着眼点について明らかにしよう。バリアンの類型について、F・イースマン（Eiseman Jr. 1989 : 第14章）、L・コナー（Connor 1982 : 252）、R・レメルソン（Lemelson 2004）を参照すると、以下のような9種にまとめることができる。

Balian Tenung : 一般的にバリアンと呼ばれる類型。予言、占いを専門とする。未来の出来事を予言するというよりも、無くしたものの場所を明らかにする、泥棒が誰か、乳児のアイデンティティの見定めなど。

Balian Manak : 助産師。

Balian Tulang : 骨折を治す。

Balian Apun（Balian Uat, Urat）: マッサージに依拠する。マントラと供物をとおして、マッサージの物理的な次元（スカラ）の行為と、神秘的な諸力の次元（ニスカラ）の操作を組み合わせる。…このバリアンの名前は、「経路」uat/urat の存在について広く共有されている概念からきており、その経路は、身体をめぐり、身体の各部分をつなぎ合わせるものである。

Balian Terang : 雨が降らないように祈る。Terang の意味は、「よく晴れた」、「明るい」。

Balian Kebal : アミュレットや指輪のような、神秘的な装具に精通し、呪文や護符を用いる。…例えば、スピリチュアルな攻撃からクライアントを守るために、クライアントが着る服に線画を描く。…魔力があると信じられている石を指輪としてもち歩き、病気になった際にはその指輪をグラスの水に入れて飲むようにすすめるということもある。このバリアンは媚薬の調剤師でもある。

Balian Taksu : 主に霊魂を媒介する。相談内容は病気に関することがほとんどである。その原因を明らかにして治癒を示唆する神や精霊との接触を望むような相談もある。原因の多くは、敵対者による嫉妬、貪欲、情念を背景として犠牲者にかけられる呪いである。神による呪いの場合もあり、適切な儀礼を行うことに失敗したり、儀礼を無視してしまうことによって生じる。

Balian Paica : 超常的な環境で得られるか、あるいは神の力で授けられた、力のある物に依拠している。クリス、布の切れ端、像など。祈祷や供物によって、その神秘的エネルギーが患者に移転される。

Balian Usada : ロンタル（故書）を持ち、場合によっては読解することによって治癒の力をもつ。ロンタルの専門家でもある。

これらの類型には、例えばBalian Paicaのように聖なる物を用いるという道具的側面からの把握と、Balian Apunのようにマッサージを行うという施術的側面からの把握が混在しており、類型としての説明力は必ずしも高いとは言えない。これに対して、N・ナラ（Nala 1993 : 113–53）は、目的から2種類、バリアンの技量を得た方法から4種類に分類している。このなかで、特に後者の4分類によって議論の整理が可能となる。

【目的による分類】

バリアン・パヌングン（Balian Panengen）：患者の病気を治療する。

バリアン・パンギワ（Balian Pangiwa）：人に病気を起こし、病気にかかっている人に対してより深刻な病気になるようにする。このバリアンはバリアン・パヌングンの仕事がうまくいかないように邪魔をすることもある。

【技量を得た方法による分類】

バリアン・カタクソン（Balian Katakson）：神に選ばれることによる。神から超自然力「タクス」（Taksu）を得たため、バリアン・カタクソン（ka＋taksu＋an＝「taksuをもらう」）と呼ばれている。多くは、バリアンになる前に、夢の中や現実世界において、精霊のような姿の存在（あるいは声だけの場合もある）を通してバリアンになるよう宣託をうける。その宣託を信じることができず、無視するような場合、原因不明の病気にみまわれ、経済的問題や人間関係の問題などが生じる。治療を受けても病気は治らず、どのような努力によっても問題を解決することはできない。バリアンになると決めた場合にのみ、それらの病気や問題は解決できるようになる。その後、供物、呪文、線香、神への祈祷など、異なる方法を用いて、病因や治療法を患者と共有できるようになる。その際、バリアンとなった本人は会話や行為の内容について全く覚えていない（トランスのような状態）。

バリアン・カピチャン（Balian Kapican）：神から呪術的な物（Pica）を得ることによる。Picaは患者を診療するために用いられる。多くの場合、Picaは宝石や短剣（Kris）などである。

バリアン・ウサダ（Balian Usada）：他のバリアンや診療に関して知識を持っている人、古文書に学ぶことによる。

バリアン・チャンプラン（Balian Campuran）：上記2つか3つの組み合わせ。

これらの分類をふまえて上述した9種に言及すると、例えば、マッサージをするBalian Apunにしても、神に与えられた力に依拠するか、呪術的な物を用いるか、学んだ知識に依拠するかというように、再分類することができる。もちろん、バリアン・チャンプランの類型が示すように、これらは全て相互排他的であるわけではない。それでもなお、この4類型が、バリアンの特徴を捉えるうえで有効である（説明力を有する）ことを実証することが、本稿の第1の目的である。

しかしながら、後のインタビューデータに示されるように、依然として、これらの類型から説明が難しいものが生じる。例えば、神から得た呪術的な物（Pica）を所有しながらも実際には使用しない場合、ありふれた植物を道具のようにして使う場合、先祖から伝承された物を使う場合などである。そこで次に、バリアンの道具と用法に着目し、その共通要素としてあげられている2つの要素（タンバとスラナ）を、具体例にあてはめながら説明するという、本稿の第2の目的について論じる。

3.2　バリアンの道具がもつ意味

バリアンの多様性のひとつに、様々な道具を用いるということに加え、その用法もまた多用であるという点がある。バリアンが使う道具に着目した研究として、クリハラほか（Kurihara et al. 2006 : 207）は、58人の精神病院の患者が、過去に訪問した137人のバリアンの診療

手段を明らかにしており、その結果は次のようなものである。

> 聖水（93.4%）、マントラ（90.5%）、オイル（41.6%）、薬草（40.1%）、マッサージ（23.4%）、宗教儀礼を行うようアドバイスをうけた（53.3%）、精神医学関連の施設に行くようアドバイスをうけた（8.0%）

聖水の使用とマントラは、バリ・ヒンドゥーの宗教儀礼に一般的にみられるものである（Kurihara 2006 : 209）。同じヒンドゥー教でも、インドでは灰を用いることが一般的な診療手段であるのに対して、バリ島ではほとんどみられない。バリ・ヒンドゥーは、アニミズムや仏教の影響をもつため、そうした違いがみられるという（Kurihara 2006 : 209）。

このような道具面での把握は、比較研究を可能とするという点で興味深いデータではあるものの、なお問題が残る。道具の用法に着目すると、マッサージをしながらマントラが唱えられるというように、実際は複数の手段が同時に用いられ得る。しかしながら、これらの手段がどのように使用され、組み合わされているのかは不明である。しかも、それらは必ずしも単一の用法に限定されない。ここにあげられる道具・その使用と、上述したバリアンの類型とがどのように関連するのかも不明である。

そこで、個々の具体的な道具に共通する要素に注目したN・ナラ（Nala 1993）の議論を踏まえると、バリアンが用いる手段（道具）自体は、あくまでバリアンのエネルギーを患者に伝達する媒介物であると考えることができる（以下、Nala 1993を参照）。バリ島ではニスカラ（Niskala：目に見えない世界）の病気の治療について、タタンバアン（Tatambaan）という技法を用いる。「タンバ」（Tamba）は薬という意味であり、一般的には植物などから調合した薬のことである。さらに、タンバは「ウバッド」（Ubad）とも言い換えることができ、病気を治療するために使用できるすべてのもの、バリアンのエネルギーなども含む。

タンバの効果を適切に発揮させるために、儀式や道具が使用される。それらは「スラナ」（Serana）と総称される。スラナは、患者の病因ごとに用意されたタンバの効果を高め、患者に滞りなく注入するための仲介物、刺激となる。マッサージや指圧、呪文などもスラナにあたる。タンバとスラナは病気を治療するために引き離すことができないもの、共存するものであると考えられる（Nala 1993 : 208）。

以上の議論を踏まえると次のような事例を想定することができる。例えば、ある薬草について、一般的には、飲むか塗るかという用法が想定されるであろう。しかし実際は、その薬草で患者を叩く、こする、患者に触れる、貼る、儀式の供物とするなど、多様に用いられている。そのような多様さの背後には、エネルギーの媒介という共通要素が見出されることになり、このことが、道具の使用の面からみたバリアンの特徴であるとみなすことができるであろう。このように、道具とその用法における2つの要素（タンバとスラナ）を、インタビューデータから検証し、説明することが本稿の第2の目的である。

4. バリアンへのインタビュー結果

先行研究におけるエスノグラフィーは、患者の症状にあわせて少数の事例観察を行い、バリアンの内的世界を明らかにするものであった（Lemelson 2004, Ruddick 1986, Connor 1982, Eiseman Jr. 1989 : 第14章）。それに対して本稿は、28人のバリアンへのインタビューにより、事象や対象の限定性を考慮した中範囲での分析を行う。インタビューは、2017年8月から9月の間に行われた。対象のサンプリングについては、バリアンについての公式の統計は存在せず、対象の把握はいわゆる口コミでのみ可能であったため、スノーボール・サンプリングを用いた。

インタビュー内容は、以上の議論をふまえ、バリアンとしての道具・技量を得たきっかけ（背景）、用いる道具・技量（タンバ）の特徴、診療・施術の方法（道具・技量の実際の使用方法）（スラナ）が主なものとなる。

【1】ワヤン・ダナ（WAYAN DANA）

ダナ氏は1993年前後からバリアンとして診療を行っている。バリアンの技量は神からもらったものである。自らバリアンについて学んだわけではなく、ロンタルについての知識も持たない。祖先にバリアンがいるというわけでもないが、関連するとすれば、儀式用の供物などを売る祖先がいた。ダナ氏の家族はバリ島の一般的なヒンドゥー教徒である。

ダナ氏の家の庭には様々な植物が栽培されており[2)]、儀式に使用できるものも多い。患者を診療する際には、特別な祈りの部屋で行う。その手順については、まず患者が持ってきた供物を祈りの部屋で奉納し、診療の開始を神に知らせる。患者が供物を持たない場合は自前の線

香や供物を使用する。その後、神の話を聞くなかで、ダナ氏には光のようなものが見えるという。次にそれが近づき、ダナ氏の舌の先端に触れる。その感触を感じることで神の宣託を受け、患者に伝えることができる。それが終わった後は、ダナ氏自身、言ったことや行ったことを全く覚えていない（トランスのような状態)。患者の病因や治療方法（薬・儀式など）については、そのときに神からのお告げがあるという。

患者の病因がナチュラリスティックな病気であれば、病院で医者の診断を受けるようにアドバイスをする。パーソナリスティックな病気であれば、必要な薬や儀式についてアドバイスをするとともに、人間関係や神との関係についても助言する。患者の回復にどのくらい時間がかかるのか、どのような経緯をたどるのかについては、患者の宿縁（*Karma*）によって異なるという。

ダナ氏はバリアンのことや診療について特別な勉強をしているわけではない。しかし、ダナ氏をとおして宣託が患者に伝えられるという経験、周囲の人々の経験自体がダナ氏の勉強になり、知識を深めることができるという。さらに、ダナ氏は家族の寺の司祭も務め、他の司祭や知識を持っている人と対話することでも、知識を深めることができるという。

【２】マデ・スパルニ（MADE SUPARNI）

スパルニ氏は2013年前後にバリアンになった。その技量は神から授かったものである。ロンタルについての知識もなく、祖先にバリアンとしての経験を持つ者はいない。バリアンになる以前、スパルニ氏は原因不明の病気にかかり、声がほとんど出せない状態になり、病院で治療を受けても治らなかった。ある日、身体の痛みに苦しんでいる時、「バリアンになる必要がある」と言う声が聞こえた。そこで、シンガラジャにいる何人かのバリアンのもとを訪れると、いずれのバリアンからも同様の話をされた。このような経験から、スパルニ氏はバリアンになることを決心し、家寺の司祭に浄化の儀式をしてもらった。その後、病気は徐々に回復するとともに、いくつかの珍しいことがあった。その一つは、ある日、家の中に蛇、カエル、ムカデが重ねてあった。しかしその数分後には、いつのまにか消えていたというものである。このような体験もまた、バリアンになるためのものと思われたという。

診療の手順については、まず、患者が持ってきた供物を祈りの部屋で奉納し、神に訪客を知らせる。その後、神とコミュニケーションを行うが、その際、スパルニ氏はトランス状態になり、誰も理解できない言語を発する。神から得た宣託について患者に話す時にも、そのような言語とバリ語で自然に言葉が出てくるという。全てが終わると、話したこと、自分でしたことなどを全く覚えておらず、患者の病因や治療方法（薬・儀式など）については、患者から教えてもらうことになる。その話をうけて、スパルニ氏は神からの薬として聖水を調合し、患者に処法する。その聖水は、水、色が異なる３種類の花、線香を混ぜ合わせたものである。水と花には息を吹きかけてから使用しなければならない。

今まで来た患者は、バリ島の様々な地域、さらにジャワ島やロンボック島の人もいた。ある患者は３年間ほど皮膚病にかかっており、通院しても回復しなかった。その患者は立つことが難しかったので、患者の子供がスパルニ氏のもとを訪れた。そこで、スパルニ氏は神に祈り、聖水を処法した。さらに、浄化の儀式を行うよう助言するとともに、動けるほどに回復した後には患者自らが来訪する必要がある旨をことづけた。聖水や浄化の儀式の後、３日ほどで患者は回復した。他には盲目のような状態、麻痺、狂気などの状態の患者がいた。

多くの患者はパーソナリスティックな病気にかかった患者である。ナチュラリスティックな病気であれば、スパルニ氏は赤いタマネギを使用する。例えば、疼痛の場合、患者の左足で赤いタマネギ（写真２－１）を踏ませてから、スパルニ氏が手で握り、患者の痛む部位に貼る。そのタマネギは患者の疾患を治癒するための神のメディアであるという。患者が治るかどうか、どのくらい時間がかかるかについては、すべて神の決めることであり、神に任せることである。スパルニ氏は、自分は仲介



写真２−１　スパルニ氏が使用する赤いタマネギ
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年８月７日）

者であると考えている。

【3】ワヤン・ウィサラ（WAYAN WISARA）

ウィサラ氏は1982年にバリアンになり、神から得た技量をもとに診療を行う。ロンタルについての知識は持たず、バリアンとしての経験をもつ祖先もいない。ウィサラ氏がバリアンになったきっかけのひとつは、現在の住居がある土地に、昔バリアンが住んでいたという歴史にある。そのことを知った経緯は、その土地の昔の建物やいくつかの植物が夢に現れたこと（夢見）による。その状況について周囲の人に尋ねたところ、その土地の昔の風景は、ウィサラ氏の夢見どおりのものであるということがわかった。そこで、その場所に昔住んでいたバリアンと同様に、ウィサラ氏もバリアンになり、役割をまっとうしないといけないと考えるようになった。

バリアンになる前から現在に至るまで、大きくて背の高い人の姿をしばしば見かけるという。その人物は、背が高すぎるので顔が見えないほどである。そのような人物を初めて見たのがちょうど1982年のことである。そのときウィサラ氏の息子は事故で入院し、脳に障害を負っていた。ウィサラ氏は、背の高い見知らぬ人と出会い、「自分の家寺で聖水をつくってもらい、息子にかけると良い」というアドバイスを得た。実際にそれを行い、手術を受けた6日間後から、息子は徐々に回復したという。ウィサラ氏が見かけるというそれらの人は、下半身に布を巻き、上半身は裸である。ウィサラ氏は、患者が来ると服を脱ぎたいほどの暑さを感じるため、結果的に、患者と向き合うときには、自分が見た背の高い人と同様の服装となる。しかし、患者が帰路につくと、元の状態にもどる。

バリアンになって初めは患者の診療方法がわからず、神からその方法についての宣託をうけるために祈る日々であった。その一環として瞑想をしている時、モリンガ（Moringa oleifera、インドネシア語で「ケロール」Kelor）という植物のイメージを見た（写真3－1）。神によれば、それは黒魔術に対抗するうえで重要な植物とのことであった。患者を診療する際は常に神に祈り、その方法を得る。患者の病因、必要な薬や儀式などについては、神への祈りの後に口から自然と発せられるとともに、身体や手が自然に動いて、患者とコミュニケーションする。全てが終わると、ウィサラ氏は何も覚えていないという。

神の宣託をうけ、患者の病気がナチュラリスティックなものであれば、病院での診察を受けるようにアドバイスをする。患者がウィサラ氏の治療を受けずに病院に行くか、ウィサラ氏の治療を受けてから病院の診断を受けるか、両立するのかについては患者の信念を元に患者自身が決めるものであるという。患者の病気がパーソナリスティックなものであれば、薬や儀式だけでなく、人間関係や神との関係についても助言を行う。その犯人が誰かについてもウィサラ氏は知ることができるが、人間関係のため患者に教えることはないという。

患者はバリ島の様々な地域から訪れ、外国人も何人か来たことがあった。ある外国人は手が動かなくなり、病院で診断を受けたが何も問題がないとの結果であった。その外国人はガイドのすすめでウィサラ氏のもとを訪れ、神の判断をあおいだ結果、患者の病気はパーソナリスティックなもの、人災病であった。さらにウィサラ氏は、神からの助言に従い人災病であることの確証を得て治療を行うために、まず、頭上のチャクラにさわり、次にモリンガの茎で背中をたたき（人災病の場合は痛みを感じる）、手で背中をなでるという順番で診察を行った。モリンガの茎で背中をたたくことで、人災病と闘う力を与えることもできるという。何回かの診療の後、その外国人は回復した。他の事例としては、デンパサールに住んでいるある人の子供は麻痺の状態であり、病院に行っても治らなかったが、ウィサラ氏の診療を3回受け

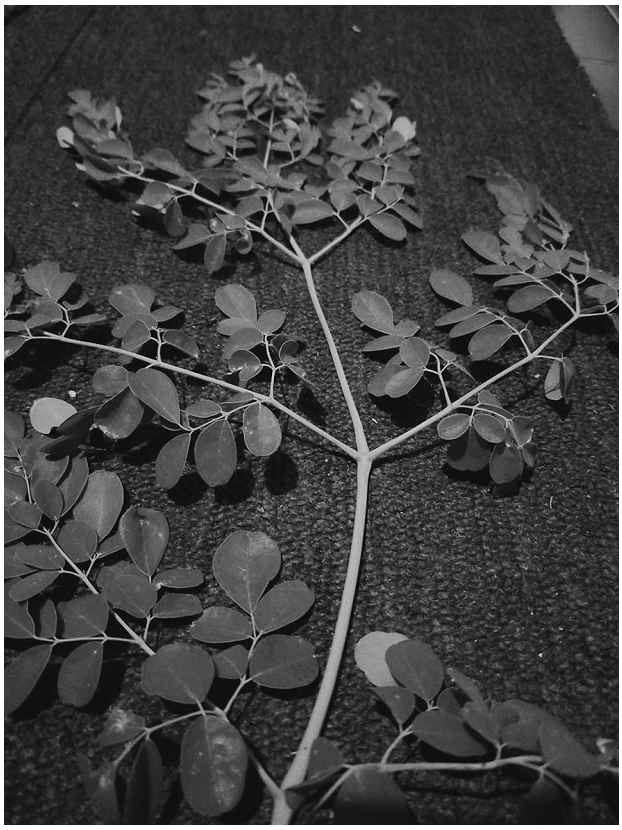


写真3－1　ウィサラ氏が利用するモリンガ
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年8月7日）

た後に回復したということもあった。

【4】マデ・アルタ（MADE ARTHA）

アルタ氏は、ロンタル（古文書）や文献に学ぶとともに、神から技量を得ることで、1986年からバリアンとして診療を行っている。祖先もまたバリアンとしての経験があり、祖先のロンタルを受け継ぎながら知識を継承している。普段の仕事は農業であり、親族の寺の司祭としての役割も持つ。そこで、アルタ氏はバリアンとしてだけでなく、司祭としての知識や経験をもとに、相談に来た人、患者に助言をしている。

診療の手順は次のようなものになる。患者が持ってきた供物を祈りの部屋で奉納し、神に知らせる。神から宣託をうけ、アルタ氏がそれを患者に伝える。あわせて、ロンタルの知識も実践する。まず、『ロンタル・ワラスパティ・カルパ』（LONTAR WRASPATI KALPA）に依拠して、患者の状況について患者の誕生日を基に占う。さらに、『ロンタル・ウサダ』（LONTAR USADA）に依拠した知識から薬を調合する。このように、アルタ氏は、神の宣託と自らの知識とを両立させて診療を行っている。アルタ氏は自分で薬を調合するが、ロンタルに記載があっても現代では必要な植物を見つけることが難しいという場合がある。その際は、代わりに中性的[3)]な植物を使う。

患者の回復期間や傾向については、患者の宿縁（カルマ：*Karma*）によって異なるという。例えば、ある患者のカルマによって病気の治癒が期待できない、あるいは病気が治る時期ではないという場合、神の宣託に基づいた治療法がわかっているにも関わらず、それを実際に実践するための儀式を適切に行うことに支障があったり、処方に必要な薬の材料を見つけることが難しいということがあった。他方で、カルマにより病気の回復が見込まれる場合は、儀式は滞りなく行われ、薬の材料もすぐに見つけることができる。

患者が亡くなる日が神によって知らされることもある。しかし、その日になってもその患者が病気に苦しみ、亡くならないという場合、その原因を神にたずねることもある。さらには、患者が定められた安らかな死をむかえることができるように神に願うこともできる。

【5】ネンガ・ウィダナ（NENGAH WIDANA）

ウィダナ氏は、古文書（ロンタル）に学び、神から技量を得て2008年にバリアンになった。祖先もまたバリアンとしての経験があった。ウィダナ氏がバリアンになったきっかけは、やはりバリアンだった父親が2008年に亡くなったことにある。その数日後、患者がウィダナ氏の家に来て、父親がいなくてもここで治療してもらえると信じていると言った。ウィダナ 氏は何をすべきか全く分からなかったが、患者を助けたいという気持ちが強まった。そこで、神に祈り、聖水や父親が調合した薬を渡した。数日後、その患者が再び来訪し、良くなったということを報告した。それ以来、父親のように患者を助けることができる方法について、神に祈り、宣託を受けるようになった。それから数ヶ月後、現在持つようなバリアンとしての技量を得るに至った。

ウィダナ 氏はロンタルの知識を持ち、祖先のロンタルを伝承している。しかし、ロンタルの知識を実践することはない。その代わりに、祖先から伝承され、この家族のみがもつ「ワナラ・ギリ」（WANARA GIRI）という知識を用いる。それはショウガやターメリックなど多種類の塊茎から作られた薬についての知識であり、診療においてはこの薬をかならず使用する。さらに、神の指導を受けながら、患者の病気にあわせて「ワナラ・ギリ」に依拠して作った薬に他の植物を加える。そのために必要な塊茎は自分で栽培する。患者が治るかどうか、どのくらい時間がかかるかについては、患者の宿縁（カル



写真5－1　ウィダナ氏と「ワナラ・ギリ」の知識を元に調合した薬
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年8月9日）

マ：*Karma*）によって異なるというが、今まで来た患者はほぼ治っているとのことである。

【6】ニョマン・アストラ・ジャヤ（NYOMAN ASTRA JAYA）

ジャヤ氏は1979年からバリアンとして診療を行っている。祖先にはバリアンとしての経験を有する者がいる。しかしジャヤ氏自身は、古文書（ロンタル）や薬の調合などについては全く分からないという。

ジャヤ氏は左手のひらに特殊な力が集中しており、患者が痛いと感じるところに左手のひらで触れることで病因が分かる。そのような力を得る以前、ジャヤ氏は事故にあい、左手を骨折した。数ヶ月後、回復と共に左手に何かの力を感じるようになった。しかし、当初、ジャヤ氏はそれらが何に役立つのか分からなかった。それと同じくして、友達、さらに見ず知らずの人が、身体が痛いのでみてほしいというように患者としてジャヤ氏を訪問するようになった。ジャヤ氏はそうした状況のなかで左手の力を自然と治療に使うようになっていった。今では、ジャヤ氏はマッサージ専門のバリアンとして知られている。左手のひらの力をより適切に使いこなすために、体の解剖学についても学んでいるという。

ジャヤ氏は左手の力を用いるだけでなく、神の宣託をうけることも行っている。その結果、ナチュラリスティックな病気であればジャヤ氏ができる限りの助成をし、それ以上は病院での診断を受けるようにアドバイスをする。パーソナリスティックな病気であれば、バリの民間療法に用いる儀式など、治す方法を教えるだけではなく、人間関係や神との関係についても助言する。例えば、田畑で転倒するという患者の場合、パーソナリスティックな影響がないのであれば、神経に支障がある部分だけを治す。他方で、パーソナリスティックな方面の影響があれば、病因（転んだ所にいる見えない人物の影響、神に悪いことをしてしまった等）を明らかにし、悪魔や悪霊を払うために必要な儀式、神のための適切な儀式についてもアドバイスする。

【7】イ・グデ・スマラ・ジャヤ（I GEDE SUMARA JAYA）

1970年代からスマラ・ジャヤ氏はバリアンとして診療を行っている。バリアンについて学んだことはなく、古文書（ロンタル）についての知識ももたない。その技量は神から授かったものである。祖先もまたバリアンとしての経験があった。スマラ・ジャヤ氏は祖先が神から与えられたというクリス（Keris）[4] を伝承しており、それを持っていることがバリアンの証である（写真7－1）。そのクリスは特別な日に突如無くなり、その後、置いてあった所に再び戻るということを繰り返した。

今まで来た患者はパーソナリスティックな病気にかかっている患者だった。診療の手順は次のようなものである。患者が持ってきた供物を祈りの部屋で奉納し、神に知らせる。患者の病因や治す方法（薬、儀式など）については神に祈り、宣託をうける。その結果、患者にマッサージを施すこともあり、その際にはココナッツオイルを使用する。そのオイルは昔、料理のために作ったオイルであった。残ったオイルを保存するうちに、徐々に量が増えてきたが、ある時、神からの助言により、そのオイルを治療に使うようになった。患者の治癒の程度



写真6－1　ジャヤ氏の診療の様子
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年8月9日）



写真7－1　スマラ・ジャヤ氏の祭壇とクリス
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年8月10日）
注）4本のクリスが奉納されているが、特別な日に突如無くなるクリスは一番左側のものである。祭壇の下にはオイルをいれた容器が並ぶ

や時間、経過の特徴については、患者の宿縁（カルマ：*Karma*）によって異なるという。患者のカルマによる規定が前提となり、証としてのクリス、神の助言によって得られたオイルが助けとなる。そのため、スマラ・ジャヤ氏は診療のための特別な知識を持たなくても、神に祈ることによって患者を助けることができるという。

【8】ニョマン・グデ・アスタワ（NYOMAN GEDE ASTAWA）

アスタワ氏は1987年前後からバリアンとして診療を行っている。古文書（ロンタル）や文献に学ぶとともに、神から技量を授かった。祖先もまたバリアンとしての経験があり、ロンタルを受け継ぎながら知識を継承している。

バリアンになる以前、アスタワ氏の妻が病気にかかり、治療のための出費がかさんでいた。そのため、生活が苦しくなっていたが、病気はいっこうに治らなかった。ある日、アスタワ氏が海岸で瞑想をしている時、若い女性の姿をした精霊のようなものが近づいて来て、自分の庇護を授けて欲しいと言い残してすぐに消えた。次の日も同様に海岸で瞑想をしていると、背が高くて大きな姿をした霊のようなものが来て、自分は、前日の女性の姿をした精霊の父親だと言った。娘であるその精霊はアスタワ氏のことを助けたいと考えており、自分もまた力になりたいとのことであった。さらに、アスタワ氏の家にある白檀（Cendana：*Santalum Album*）を使用することで、妻を治療できるとの助言があった。精霊は続けて、自分たちに選ばれ妻の治療も可能になったことを踏まえ、アスタワ氏はバリアンになる必要があること、そのためにプラ・メランティン（Pura Melanting）という寺院にいる自分たち精霊一族の宣託を受ける必要があることを伝えた。

治療の手順は次のようなものである。まず、患者が持ってきた供物を祈りの部屋に置いて、訪客を神に知らせ、患者の本質が悪霊（Evil Spirit）か善霊（White Spirit）かについて感じとる。患者の状態については、神に祈ることで宣託を得て、病因や直す方法（薬や儀式など）について、トランス状態のなかで患者に伝える。すべて終わると、自らが言ったことや行ったことを全く覚えていない。患者を触診したり、マッサージする必要があるかどうかについても、神からの指導がある。もし、触れることが失礼となる身体の部分に疾患がある場合は、直接その部分を触る代わりに、糸を媒介としてその部分を診察・治療する。



写真４−12　アスタワ氏の祈りの部屋の中にある祭壇
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年８月10日）
注）プラ・メランティンの神像が奉納されている

患者に関しての経験については、神からの宣託といくつかのロンタル、『ロンタル・ウサダ（・タルプラマナ）』、『ロンタル・ワラスパティ・カルパ』（LONTAR WRASPATI KALPA）、『ロンタル・プングン・ティワス』（LONTAR PUNGGUNG TIWAS）[5]に基づき診療を行う。それらに加え、ロンタルに記載されている知識を用いて動物、宝石、金属など自然のものを使うこともある。アスタワ氏は、治療のために必要な物・植物などが手に入らない場合、代わりの植物を利用可能なものとするために、『ロンタル・プングン・ティワス』に記載されている呪文を用いることもある。神の宣託および診察によって、患者の病気がナチュラリスティックなものであれば、病院での診断を受けるようにアドバイスをする。パーソナリスティックな病気であれば、必要な薬や儀式、人間関係や神との関係についても助言する。パーソナリスティック、すなわち人災病であれば、アスタワ氏はその犯人が誰かを知ることができるが、人間関係のため患者に直接教えることはない。最終的に、患者の治癒の早さや程度は、患者の宿縁（カルマ：*Karma*）によって異なるという。

【9】スラヅニャナ（SURADNYANA）

1999年からバリアンとして診療を行っている。その技量は祖先から受け継いだものであるが、経験を積む途上において他の人を助けたいという考えを強くし、診療の知識を高めるために様々な文献を読んだ。バリアンになる以前、体や頭がふらふらして混乱することがあったが、その原因は不明であったため、他のバリアンに診察してもらった。その際、スラヅニャナ氏の祖先がもっていたバリアンの役割を継ぐ必要があると言われた。

スラヅニャナ氏は本稿でインタビュー対象となった他のバリアンと異なり、祈りのための特別な部屋を持たない。スラヅニャナ氏の家は狭いので、患者の診療、神のための祭壇、親族や友人と過ごす所としても、ひとつの客室がそれら全ての役割を担う。スラヅニャナ氏の家は親族の家と隣接して建てられており、それらの家は全て親族の寺院の周辺に位置する。換言すれば、その寺院の周辺は全てスラヅニャナ氏の親族の家ということになる。そのような住宅の配置はバリ島の伝統的な様式であり、バリ島のいくつかの地方に現存するものである。スラヅニャナ氏の村では、そのような住宅の様式は6箇所ほどあるとのことである。

神の宣託によって、患者の病気がナチュラリスティックな病気であると判明した場合、スラヅニャナ氏が病院の診断を受けるようにアドバイスをする。文献から学んだ知識を用いて治療を行うこともある。パーソナリスティックな病気、人災病である場合は、供物と線香を通して神に祈る。その時、神から患者の病因と治療方法について宣託を得る。スラヅニャナ氏は誰がその病気の原因となっているのかに言及せず、病因と治療方法を患者に伝える。

スラヅニャナ氏は様々な植物をまぜて薬用のオイルを調合する。その知識は神から得たものである。パーソナリスティックな病気、人災病にたいする薬を調合する時には、そうしたオイルを使用することがある。調合に必要な植物を得るのが難しい場合には、植物の含有成分を考えて他の植物を代用している。

【10】ワヤン・スヤサ（WAYAN SUYASA）

2002年からバリアンとして患者の診療を行っている。バリアンとしての技量は出身地にある寺院の神から得るとともに、バリ島の東に位置するロンボク島のムスリムから学んだ。その人に出会い、イスラム教の教えの方が自分に合う、理解することが難しくないと言われたことをきっかけとして、イスラム教に基づく知識、特に、自らの内にある力（Inner power）と治療方法について学んだ。しかしながら、スヤサ氏は改宗したわけではなく、今でもヒンドゥー教徒としての義務を守りながら生活している。

治療においては、水（聖水）、塗り薬（Boreh）、マッサージ（全てイスラム教の教え）を利用する。病因と必要な薬を特定するうえで、スヤサ氏は自らの手を使用する。スヤサ氏の手と足にはレラジャハン（Rerajahan）[6]が書かれている。スヤサ氏によれば、それを書いた人は、ロンボクでスヤサ氏に教えを授けた人の先生にあたる人物であり、すでに何百年か前に亡くなっているという。

スヤサ氏は黒魔術（Black Magic）を作り出すこともできる。しかし、悪い目的を持つ人が利用できないように、その費用は高く設定されている。その人の経済状況を見定め、悪い人の場合はその人が払うことができないような高額な料金を提示する。スヤサ氏は依頼を断ることが禁じられているため、わざとそのような回りくどい方法をとって黒魔術を広めないようにしている。それとは逆に、夫婦がそろって末長く一緒に協力していけるように、というような良い目的を持っている人の場合、無料で援助することもあるが、そのために必要な物については依頼者（患者）が用意する。

【11】ワヤン・ゲルゲル（WAYAN GELGEL）

ゲルゲル氏がバリアンとして診療を行っているのは1982年からである。バリアンとしての技量・知識は古文書や文献から学んだものではなく、祖先からうけついだものである。祖先から伝承された知識と日時（暦）に従って、およそ150種類の寄生植物から調合したオイル、海や森の様々な物で作ったオイル、飲み薬（Loloh/Jamu）を調合し、薬として使用する。そのための原材料は、必要な時にその都度、必ず見つけることができる。

ゲルゲル氏は農業に従事するとともに豚を飼育している。その豚を売ったり、あるいは、雌豚を飼っている人に繁殖のために雄豚を貸すというようなことも行っている。バリ島において豚は、宗教儀礼に用いたり食用としても一般的である。そのため、豚を飼育している人が多く、雄豚を貸す機会はそれなりに多い。借りた人は謝礼として、金銭での支払いのほか豚の子供を何匹か譲渡することもある。ゲルゲル氏はそのような仕事をしているので、様々な所へと出向く機会が多く、その途中で薬を調合するために必要な植物がみつかることもあるとい

う。海釣りに行くこともあり、必要とされる海の物はその時に見つかることがあるという。

ゲルゲル氏の診療方法は次のようなものである。供物を家の特別な部屋で奉納し、神に祈る。マッサージが必要な部分があれば、ゲルゲル氏の手が自動的に動く。病因や薬については神から知識を得て、ゲルゲル氏がそれを患者に伝え、患者自身が薬を用意する。薬のため必要なものがあれば無料で提供する。聖水は必ず患者に提供する。ゲルゲル氏が調合したオイルを薬に混ぜることも頻繁にある。ゲルゲル氏によれば、人を助けることが自分の義務であると考えているので、できる限り患者を助けたいとのことであった。

【12】グデ・マンク（GEDE MANGKU）[7)]

マンク氏は2001年からバリアンとして診療を行っている。神から得たバリアンとしての技量の他には、特に学ぶということはしていない。祖先もまたバリアンとしての経験をもつ。神から送られた短剣（Keris）を祖先から継承しており、それを持っていることがバリアンの証である。

診療方法は、患者が持ってきた供物を祈りの部屋で奉納し、神に訪客を知らせる。患者の病因や治す方法（薬、儀式など）については神に祈ることで宣託を得る。それをうけ、患者にマッサージが必要なとき、必要な部分を触りながら神に祈る。患者が治るかどうか、どのくらい時間がかかるか、患者の宿縁（カルマ：*Karma*）によって異なるとマンク氏は考えている。例えば、二人の患者がおり、同じ植物を必要しているとしよう。この場合、その植物が身近なものであっても、カルマによって、いつもどおり簡単に見つかることもあれば、なかなか見つからないこともある。マンク 氏の患者のなかには実際にそのようなことがあった。

【13】グデ・ゴビヤ（GEDE GOBYAH）

1979年からバリアンとして診療を行っている。バリアンとしての技量は神から得るとともに、祖先もバリアンとしての経験があり、知識や技量が伝承されてきた。それとともに、『ロンタル・ワラスパティ・カルパ』（LONTAR WRASPATI KALPA）という祖先伝来の古文書について勉強した。ゴビヤ氏は、家にある特別な部屋で診断や治療を行う。その部屋の中には、高い所に神の居所、その下に供物を奉納する場所が設置されている。ゴビヤ氏はその前に座り、神に祈る。部屋の前にはいくつかのイスがあり、患者はそこで診察の順番を待つ。

ゴビヤ氏は黒く丸い石を使い、日常生活で人と電話するかのように、丁寧なバリ語で3体の神とコミュニケーションをとる。それら3体の神の力は、それぞれ、ゴビヤ氏の舌（デワ・アユ・マニク・マス・ムクテル神：Dewa Ayu Manik Mas Meketel）・目（デワ・アユ・マニク・マス・ンゲンチョロン神：Dewa Ayu Manik Mas Ngencorong）・手（デワ・アユ・マニク・マス・プラギナ神：Dewa Ayu Manik Mas Pregina）を通して表出される。舌は話すための力、目は見えないものを見る力、手は治療の力である。それらの力によってゴビヤ氏は患者の病気を診断し、病因や治療方法を伝える。それだけでなく、出身地の村にある寺院の司祭として勉強し、敬弔行事をとりしきるため、治療知識だけでなく儀式に必要な供物についても詳しい。治療知識は古文書から得ることができるだけでなく、患者の経験からも勉強になるとのことである。

患者が治るかどうか、どのくらい時間がかかるかは、患者の宿縁（カルマ：*Karma*）によって異なるという。そのことをふまえ、患者や相談に来た人には、人間関係や神との関係についてもアドバイスをする。

【14】ニョマン・スダナ（NYOMAN SEDANA）

スダナ氏は17歳の時からバリアンとして診療を行っている。その技量は祖先から伝承されたものである。バリアンになることは家族の中の義務と考えられており、祖先からの伝承を守る必要があるという。

バリアンになる以前、スダナ氏は混乱したまま回復しないという病気にかかった。その時にバリアンであった父親が神に祈ると、スダナ氏がバリアンとしての義務を継承する必要があるという宣託があった。そこで、スダナ氏は父親がそうであったように、何かから学ぶというよりも神に祈ることに集中するようになった。そのなかで、患者のことは神の力に任せ、自分自身は神と患者の仲介者であると考えた。スダナ氏によれば、「本当に何もしていない、ただ神の助言に基づいて話をする」とのことである。

治療法については、供物を通して神に祈り、患者の身体に触れなければならない部分があれば、スダナ氏の手が自動的に動くという。薬が必要である場合は、スダナ氏はトランス状態になり、本人の意識がない状態でその材料について患者に話すが、スダナ氏自身が調合するということはない。それらは、スダナ氏の家にある特別な祈りの部屋で行われる。

【15】ニョマン・スパルナ（NYOMAN SUPARNA）

2003年からバリアンとして診療を行っている。その技量は神から得たものである。祖先もまたバリアンとしての経験をもつ。スパルナ氏は普段、ジャカルタにある企業のジェネラルマネージャーとして働き、バリに帰ってきた時だけバリアンとして診療を行っている。バリでは親族の寺院の司祭として敬弔行事もとりしきる。スパルナ氏の家は広く、壁や柱に多くの彫刻がほどこされ、バリ島の伝統的文様をデザインとして取り入れている。診療を行うための祈りの部屋も、他のバリアンの部屋に比べてデザイン性が豊かである（写真15−１）。

診療の方法は次のようなものである。まず神に祈り、患者の診断を行う。ナチュラリスティックな病気であれば、病院で診断を受けるようにアドバイスをする。パーソナリスティックな病気、人災病については、祖先が神から授かった山椒の実を使う。まず、その実を両手で挟み、両手の間で転がすようにしながら神に祈ることで、山椒に神聖な力を宿す。その後、その山椒を患者の足の

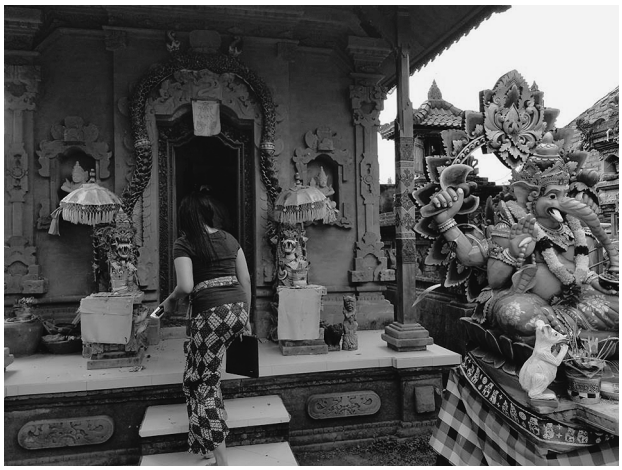


写真15−１　スパルナ氏が治療を行うための祈りの部屋
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年８月18日）

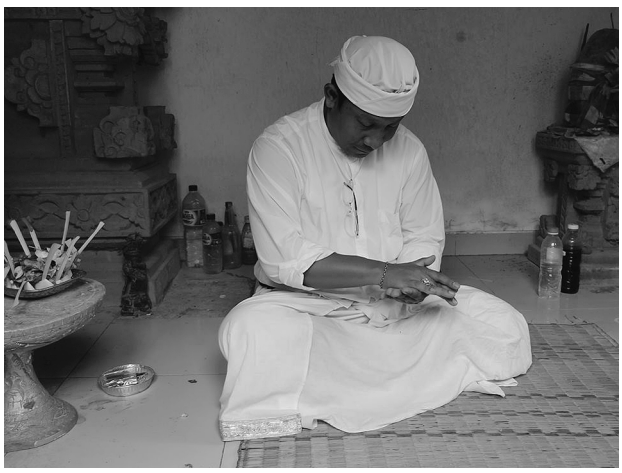


写真15−２　神に祈りながら山椒を手で転がすスパルナ氏
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年８月18日）



写真15−３　足の親指に山椒を当てがうスパルナ氏
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年８月18日）

親指に当てがい、それを通して患者の様態を診断する（写真15−２，15−３）。人間関係を大事にするため、人災病の原因となった人物ついては言及せず、病気の治療の内容について強調するとのことである。

【16】クトゥットゥ・ディアジャ（KETUT DIAJA）

ディアジャ氏は1997年からバリアンとして診療を行っている。神の宣託をうけて祖先から技量をうけついだ。ディアジャ氏は読み書きができないため、古文書や文献を読むというような特別な勉強はしていない。バリアンになる以前、家族は長期間、理由なく病気になり、病院に行っても治らなかった。ある日、突然自宅を訪れた見知らぬ人から「あなたがバリアンにならないと家族は治らない」と言われた。デイアジャ氏は学校に行っておらず、読むことも書くこともできないので無理なことであると思った。しかし、その人の話が気になり、家族の回復を願う気持ちも強かったので、瞑想を通して神に祈ると、バリアンになるという気持ちが強くなった。その時はすでに祖父も父親も亡くなっていたが、二人ともかつてはバリアンだったので、神から伝えられた技量は、同時に、祖先からもらったものだとも考えられた。病因や治すための方法については、神から宣託を受け、それを患者に伝える。神の指示で植物や動物などから作った薬やオイルを使うこともあり、患者が用意している薬とまぜあわせる場合もある。

【17】クトゥットゥ・スタマ（KETUT SUTAMA）

2001年からバリアンとして診療を行っている。スタマ氏はバリアンになる以前からバリ島の文化に関心があり、バリ島の文化についての文献を読むことが好きである。そこで、伝統医療について、特に『ウサダ・バリ』

（Usada Bali）と『ウサダ・タル・プラマナ』（Usada Taru Pramana）に興味を持った。それらを中心にバリアンについても勉強してきたが、バリの伝統医療についての知識は膨大であるため、自分が持っている知識は十分ではないと考えているという。祖先にバリアンであった者はいないため、現在行っていることは読書や経験に基づくものである。

診療方法としては、患者の症状を聞き、自らの知識をもとに薬についてアドバイスする。他のバリアンと異なり、スタマ氏は特別な祈りの部屋を持たず、供物も使用しない。治療についてだけでなく供物や悪魔払いについても勉強し、知識を持っているので、それらに関する相談を受けることもある。



写真18−2　祈りの部屋の中にある様々な物
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年９月10日）

【18】イ・ニョマン・リムン（I NYOMAN RIMUN）

リムン氏は1957年からバリアンとして診療を行っている。技量は神から得たものであり、祖先にもバリアンとしての経験があった。神から授かった技量を高めるために、バリアンの知識を持っている人のもとで様々な勉強をし、瞑想をした。

診療方法は次のようなものである。まず供物をささげて神に祈り、自分の体に宿る超自然力や、海と森の生物・無機物の力を利用する。それらを通して神から必要とする治療法について宣託をうけ、患者に伝える。

リムン氏は原本を見ずにレラジャハン（Rerajahan：呪術的な護符の一種）を書くことができ、さらに超自然力を利用してレラジャハンに魂を入れることもできる。その一つは「ブタ・シウ」（Buta Siu）と呼ばれるレラジャハンであり、黒魔術を防ぐためのものである。

リムン氏はクリス（Keris：短剣）や宝石など様々な物を神から授かった。さらに、友人のバリアンや周囲の人びとから頂いた海の植物、様々な木・根などを、家の内外、特別な祈りの部屋の中に飾っている（写真18−１，18−２）。リムン氏は、それらの物が様々な意味や力を持っていると信じている。



写真18−１　リムン氏の家にある様々な物
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年９月10日）

【19】イ・ニョマン・プラスチカ（I NYOMAN PRASTIKA）

1979年からバリアンとして診療を行っており、父親も昔バリアンだった。プラスチカ氏はバリの伝統医療について、古文書（ロンタル）や文献をとおして勉強している。治療においては、主に古文書に基づく知識を実施する。バリ島のスマラプラ県カマサン村 にある出身の家には、バリ島の様々な古文書が保管されている。プラスチカ氏の祖先はスマラプラの王族の出自であり、古文書を多く所有し保存してきた。治療に際しては、『タットワ』（Tatwa）、『トゥトゥル』（Tutur）、『ウサダ』（Usada）というロンタルに記載されている知識に基づく。治療の方式として、患者との対話のなかで症状を診断し、セラピーを行う。さらに薬を調合し、浄化を行う。プラスチカ氏は自らの知識を基に大半の必要な薬を調合することができ、患者のために無料で提供している。

【20】イダ・バグス・スアタマ（IDA BAGUS SUATAMA）

1992年からバリアンとして診療を行っている。祖先もバリアンとしての経験をもつ。スアタマ氏はバリの伝統医療について勉強し、治療法については主に古文書に基づく知識を実践する。その際、まず「ロガ・パリクサ」（*Roga Pariksa*）という、アーユルヴェーダ（*Ayur Veda*）の診断手法[8]から始め、続いて『ウサダ』に基づ

く知識を用いる。ロガ・パリクサの具体例としては、目、爪、舌と口、血液、肌、尿、糞便を診断対象とする。

それらの知識を習得することで、スアタマ氏は患者を見るだけで病気の特徴について即座に判断できる。しかし、患者との対話のなかでそれを確認することを怠らない。患者の自宅の周囲の状況についても遠方から見ることができ、そのイメージをもとに病因を特定することもできる。『ウサダ』には様々な種類があるが、治療を行う際には、特に薬草についての解説がなされる『ウサダ・タル・プラマナ』に基づく知識を利用する。スアタマ氏によれば、薬として利用できる植物は五つに分類できるという。それらは（1）バナスパテイ（*Banaspati*：花はできないが、果実ができるほど高くまで成長できる木、例：タル・ビンギン Taru Bingin：*Ficus benjamina*）、（2）ウリクサ（*Uriksa*：花と果実ができ、高くまで成長できる木、例：グアバの木）、（3）トレナ（*Trena*：草類）、（4）グルマ（*Gulma*：潅木）、（5）ラタ（Lata：つる草）である。スアタマ氏は自らの知識を基に大半の必要な薬を調合することができる。

【21】イダ・バグス・マデ・バジェラ（IDA BAGUS MADE BAJERA）

1997年からバリアンとして診療を行っている。その技量は、バジェラ氏自らがバリの伝統医療について勉強し、身につけたものである。治療においては主に古文書に基づく知識を実施する。治療については「ロガ・パリクサ」（*Roga Pariksa*：病気の検査）と「アスタ・ヴィダ・パリクサ」（*Asta Vidha Pariksa*）というアーユル・ヴェーダの知識を実施する。それらはナディ・パリクサ（Nadi Pariksha：脈や血圧の診断）、ムトラ・パリクサ（*Mutra Pariksha*：尿の診断）、マラ・パリクサ（*Mal Pariksha*：便の診断）、ジヴァ・パリクサ（Jihva Pariksha：舌と口の診断）、サブダ・パリクサ（*Sabda Pariksha*：声の診断）、スパルサ・パリクサ（Sparsha Pariksha：肌の診断）、ドゥルック・パリクサ（*Druk Pariksha* ：目の診断）、アクリティ（*Aakriti*：外見の診断）である。さらに、バジェラ氏は薬草の古文書『ウサダ・タル・プラマナ』の知識に基づく薬を調合し治療する。そのため、出身地であるギアニャル県にある自宅に、薬用の様々な植物を栽培している。バジェラ氏は特に、糖尿病の治療を得意としており、糖尿病に良いバリアンとして知られている。

【22】ニ・ワヤン・スクリニ（NI WAYAN SUKRINI）

スクリニ氏は、ルンプヤン（Lempuyang）という寺院の神に選ばれ、1997年2月12日からバリアンとして診療を行っている。バリアンであった祖先は全くおらず、スクリニ氏は家系の中で初めてのバリアンである。

バリアンになる以前、ルンプヤンの司祭であると自称する人が突然スクリニ氏の家を訪れた。その僧侶は「私は神から授かった言葉を伝えます。あなたはヒャン・アグニ・ジャヤ（Hyang Ageni Jaya）という神から選ばれたので、バリアンにならないといけません」と言った。しかし当時、子供たちはまだ小さく、お金がかかるので、そのとき就いていた仕事を頑張りたいと思い断った。しかし、神の言葉に従わなければ狂気に陥ることになるとその僧侶から警告された。スクリニ氏はその話を聞き恐怖を感じたため、バリアンになることを決心し、その司祭にバリアンになるための浄化の儀式をしてもらった。司祭曰く、浄化から二日後に必ず患者が来るので、外出せずに家にいて下さいとのことであった。しかし、突然のことなのでスクリニ氏はその責任から逃げたかった。そこで、二日後、患者がくると予言された当日は、夕方まで外出することにした。

スクリニ氏が帰宅すると、ロンボク島から来たという患者が待っていた。その患者は肛門が出血する病気とのことであったので、病院で診断を受けることをすすめたが断られた。その患者は、ヒャン・アグニ・ジャヤから得られるはずの治療法が欲しいと言った。しかし、患者に対して何をすべきか分からなかった。この出来事の数年前、スクリニ氏は神からの贈物と考えられる宝石を手にしていた。そこで患者を家寺に座らせて、その宝石をコップ一杯の水の中に入れ、供物と一緒に奉納し、日常的な言葉で神に祈りを捧げた。その後、宝石を入れた水を患者に飲ませた。二日後、その患者が再訪し、病気が治りはじめたことを知らせに来た。それをうけスクリニ氏は、家寺の前に植えているココナツを取って、供物と一緒に寺の祭壇に奉納して神に祈りを捧げた後、そのココナッツを患者に飲ませた。なぜそのような方法を行うことにしたのか、スクリニ氏自身も理解できなかった。それから数日かけて患者は完治した。

その後は慢性腎臓病の患者、また別の日には鬱病にかかっている人が来た。このように最初の頃は、一日に一種類の病気にかかっている患者が来るという日々が続いた。さらに後には、より多くの様々な患者が来るようになった。バリアンになってから4年間、スクリニ氏は自分が行っていることを理解できず、信じることができな

いままストレスを感じてきたが、現在では神の導きを信じるようになった。

これまでスクリニ氏は診療の手法等については何も勉強していない。診療の際に使用するものは宝石を入れた聖水、ココナツ[9]やココナツのオイルだけである。

【23】イ・クトゥットゥ・プルナ（I KETUT PURNA）

バリ島の聖なる山とされるアグン山にいるというラトゥ・グデ・サクティ（Ratu Gede Sakti）という神に選ばれることで、2011年からバリアンとして診療を行っている。プルナ氏の祖父はかつてバリアンであり、父親はヒンドゥー教の司祭だった。そのことからプルナ氏は、自分のバリアンとしての技量は祖先から得たものであると考えている。診療に関しては古文書や文献などに学ぶということはなく、特別な祈りの部屋で神に祈るのみである。

バリアンになる以前、プルナ氏は宝石を手に入れる機会があった。当初、その宝石は友人にあげてしまった。しかしある時、その宝石は友人のもとからなくなり、プルナ氏の所に戻っていたということがあり、神から賜ったものであると感じられるようになった。しかしその宝石が何を意味するのかはわからなかった。

プルナ氏はある時から病気にかかり、どのような仕事をしてもうまくいかず、経済的に苦しい日々が続いた。病気も治らず出費が嵩んだため、経済的には困窮する一方であった。ある日、夢の中で「バリアンにならないといけない」という声が聞こえ、件の宝石が見えた。その後、病気の治療のために何人かのバリアンのところを訪れると、同様にプルナ氏はバリアンになる必要があるという話を聞かされた。こうした経験をとおして、その宝石はバリアンの証であると考えるようになり、バリアンになることを決意した。バリアンになる儀式を行った後、病気は徐々に回復し、経済状況も苦しくない程度に回復していったという。

【24】イ・クトゥットゥ・スディアナ（I KETUT SUDIANA）

2000年からバリアンとして診断を行っている。祖先にはバリアンであったような人物はいない。スディアナ氏は神から賜ったという「８」の形の宝石を使用し、人びとを助けることができる。その宝石の形がなぜ「８」の形をしているのか、その意味については、瞑想をすることで分かってきた。「８」の上部の円形は、神に祈る力を示し、下部の円形は治療力を示す。それらをより確かなものとするため、スディアナ氏はヒンドゥー教の文献に学び、瞑想や自らの内にある超自然力について知識を深めた。

治療方法については、チャナン・サリ（Canang Sari）[10]またはプジャティ（Pejati）[11]という供物を奉納し、神に祈りを捧げる。一般に、チャナン・サリやプジャティの一部にお金を付けることがあるが、その際、スディアナ氏はバリ島の古い硬貨を使用する。次に、神から得た力を自らの手に流すように集中して、再び神に祈る。宝石は指輪としていつも指に付けている。その手を使うことで患者の病因が分かる。治療においては、自らの内にある超自然力と聖水を用いる。

【25】ルー・タマ（LUH TAMA）

祖先から継承した技量をもとに、それ以外には特に学ぶということはなく、30年間ほどバリアンとして診療を行っている。タマ氏は、村にあるプラ・バクンガン（Pura Bakungan）という寺院のイダ・バグス・バジュラ・サンディ（Ida Bagus Bajra Sandhi）とデワ・アユ・マス・ミラー・サリ（Dewa Ayu Mas Mirah Sari）という神に仕える。タマ氏には子供の頃から「見えない世界にいる存在」の「友達」が108人おり、それらの存在はタマ氏のことが好きだという。子供の頃は、意識せず、それらの存在と遊んだり話したりすることも多かった。それを見た人は、タマ氏が独り言をつぶやいているのだと考えていたようである。しかし、母親の指導により、公共の場ではそれらの存在とコミュニケーションしないようにした。

タマ氏は神からピンク色の宝石を賜った（写真25−1）。治療の際には、神に祈りを捧げる。病因や治療法について宣託があると、それをタマ氏が患者に伝える。し

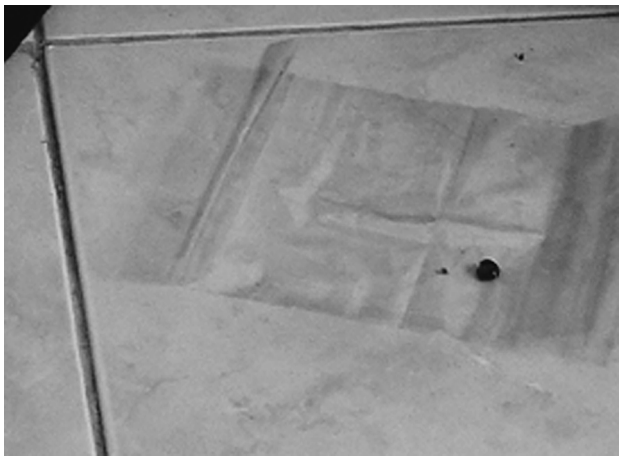


写真25−１　タマ氏が使用するピンク色の宝石
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年８月15日）



写真25−2　ピンク色になった水
出典：N・アンガライニによる撮影（2017年８月15日）

ばしば得ることができる神からのメッセージは、宝石を使用したものである。まず、ボトルやコップに入れた水のとなりに宝石を置く。その何秒後かには、透明な水がピンクに色づく（写真25−2）。その後、その水を患者に飲ませる[12)]。

【26】イ・ワヤン・コルタヤサ（I WAYAN KORTAYASA）

1980年からバリアンとして診療を行っている。祖先にバリアンはおらず、コルタヤサ氏自身、何かに学ぶという経験も持たない。その代わり、自らの内にある超自然力を利用している。神から得た能力として、コルタヤサ氏は第六感が強く、過去のことと将来のことを見ることができる。治療する際には、神に祈りを捧げ、患者の必要な部分を触り、聖水を用いる。

バリアンになる以前、コルタヤサ氏はいつもフラフラして身体が落ち着かず、混乱することがあり、原因は不明であった。家族や職業についても、不運なことが続いた。例えば、起業した銀行の操業がうまくいかず、従業員が不正を働いたり、子供が学校に行かず、家族関係が悪化するなどの状況であった。ある時、夢に見知らぬ人が現れ、「バリアンにならないといけない」と言われた。コルタヤサ氏は、それがただの夢なのか、それとも実際に遂行すべきメッセージであるのかを確かめるために、数ヶ月間瞑想を行った。その結果、バリアンになることが必要であると確証を得て、実際にバリアンとして診療をはじめることを決心した。

これまでに様々な患者が訪れ、コルタヤサ氏はパスラマン（Pasraman）というヒンドゥー教の宗教教育の学校のような場所もつくった。そこにはこれまで約４千人が訪れ、第六感を強化したり、心理面をうまくコントロールできるようにするために瞑想したり、祈祷したりしている。

【27】ウィスタワン（WISTAWAN）

ウィスタワン氏は2000年からバリアンとして診療を行っている。バリアンとしての祖先がいて、文献からも勉強している。

バリアンになる以前、原因不明の病気で長男が亡くなった。その後、見知らぬ人が来て、バリアンにならないといけないと言われた。自分が本当にバリアンにならないといけないかどうか、数人の他のバリアンや司祭に聞いたところ同じ意見であった。

治療する時には聖水や呪文を使用したり、神に祈祷する。一般書や専門書の知識を参照し、家の庭に薬用の植物も栽培しているが、その植物は家族や友達や周辺の人のために利用する。

【28】グデ・キスワラ（GEDE KISWARA）

1998年からバリアンとして診療を行っている。その技量は祖先からうけついだものである。診療法は供物を奉納し、神に祈りを捧げることが主である。文献や古文書などについては勉強していなかった。しかし、患者と接してきた経験や友人との会話を通して、薬としての植物の知識を得るに至っている。キスワラ氏はジンバランという観光化されている地区に住んでいるので、患者のほとんどはその周辺に住んでいる人びとであり、遠方からそのような地区を訪れる患者はほとんどいないという。

以上のインタビュー結果をまとめたものが表１である。

5. 考察と結論

28ケース中、26ケースのバリアンが神から力や技量を得ており、その点で、バリアンは超自然力をもつ者という定義（Eiseman Jr. 1989, Connor 1982）と一致する。しかしここでは、そのような一般的理解をカッコに入れ、N・ナラ（Nala 1993）による４類型と、道具の用法におけるタンバとスラナに着目して事例を分析する。

まず、バリアン・カピチャンについてであるが、N・ナラ（Nala 1993：113−53）によれば、神から得た呪術的な物をきっかけとしてバリアンになるだけでなく、それを診療に使うということであった。本調査では、短剣（事例 7、12）と宝石（事例22、23、24、25）があげられていたが、事例 7、12、23はバリアンの証としての

表1　インタビュー対象となったバリアンの特徴

番号	名前	特徴	診療に使う特徴的な道具	ロンタルの知識	技量の基盤	バリアンの種類
1	WAYAN DANA	● 光のようなものを見る ● →それが近づき、舌の先端に感じる ● →患者に自然に話す		×	△　学び ×　祖先から ○　神から	Katakson
2	MADE SUPARNI	● 分からない言語で話す（神とコミュニケーション）	● 聖水（水＋線香＋3色の花） ● 赤いタマネギ（貼る）	×	×　学び ×　祖先から ○　神から	Katakson
3	WAYAN WISARA	● 患者が来たら、暑くなり、上半身は裸のような姿になる ● →患者が帰ると元の状態にもどる	● モリンガ（たたく）	×	×　学び ×　祖先から ○　神から	Katakson
4	MADE ARTHA	● 患者が亡くなる日が神によって知らされる ● 定められた安らかな死をむかえることができるように神に祈祷する	● 薬	○：ウサダ	○　学び ○　祖先から ○　神から	Campuran （Katakson, Usada）
5	NENGAH WIDANA	● 親族のみがもつ「ワナラ・ギリ」という知識	● 薬（「ワナラ・ギリ」に基づく）	△（知識はあるが実践はしない）	○　学び ○　祖先から ○　神から	Campuran （Katakson, Usada）
6	NYOMAN　ASTRA JAYA	● 左手のひらの力 ● 触れることで病因が分かる		×	○　学び ○　祖先から ○　神から	Campuran （Katakson, Usada）
7	I GEDE SUMARA JAYA	● 神の助言により、ココナツオイルを使う	● ココナツオイル（マッサージ） ● 証としての短剣	×	×　学び ○　祖先から ○　神から	Campuran （Katakson, Kapican）
8	NYOMAN GEDE ASTAWA	● 糸を媒介として診察できる ● 患者の魂の善悪を感じる	● 糸（触診） ● 呪文（ロンタル） ● 動植物、無機物（ロンタル）	○：ウサダ、ワラスパティ・カルパ、プングン・ティワス	○　学び ○　祖先から ○　神から	Campuran （Katakson, Usada）
9	SURADNYANA	● 神の助言により植物由来の薬用オイルを使う	● 薬用オイル	×	○　学び ○　祖先から ○　神から	Campuran （Katakson, Usada）
10	WAYAN SUYASA	● イスラム教の教え ● 手にレラジャハンが描かれている ● 黒魔術（Black Magic）を作る	● 聖水、塗り薬、マッサージ	×	○　学び ○　祖先から ○　神から	Campuran （Katakson, Usada）
11	WAYAN GELGEL	● 祖先伝来のオイル ● 普段は農業と豚の飼育	● 聖水 ● オイル、調合した飲み薬	×	×　学び ○　祖先から ○　神から	Katakson

12	GEDE MANGKU	● 神に祈る	● 証としての短剣（クリス）	×	× 学び ○ 祖先から ○ 神から	Campuran （Katakson, Kapican）
13	GEDE GOBYAH	● 黒く丸い石で3体の神と接触し、舌・目・手を通して表出される	● 黒く丸い石	○：ワラスパティ・カルパ	○ 学び ○ 祖先から ○ 神から	Campuran （Katakson, Usada）
14	NYOMAN SEDANA	● 17歳のときから ● 家族の義務として		×	× 学び ○ 祖先から ○ 神から	Katakson
15	NYOMAN SU-PARNA	● 山椒の実を使い診断する	● 山椒の実（あてがう）	×	× 学び ○ 祖先から ○ 神から	Katakson
16	KETUT DIAJA	● 読み書きができない	● 調合した薬やオイル	×	× 学び ○ 祖先から ○ 神から	Katakson
17	KETUT SUTAMA	● 特別な祈りの部屋を持たず、供物も利用しない ● 相談を受け、アドバイスする		○：ウサダ・バリ、タル・プラマナ	○ 学び × 祖先から × 神から	Usada
18	I NYOMAN RIMUN	● 原本を見ずにレラジャハンを描く ● レラジャハンに魂を入れる	● レラジャハン（護符） ● 短剣、宝石、置物	×	○ 学び ○ 祖先から ○ 神から	Campuran （Katakson, Usada）
19	I NYOMAN PRAS-TIKA	● 実家に古文書が保管されている	● 薬	○：ウサダ、タットワ、トゥトゥル	○ 学び ○ 祖先から ○ 神から	Campuran （Katakson, Usada）
20	IDA BAGUS SUA-TAMA	● アーユルヴェーダにもとづく ● 遠視をすることができる	● 薬	○：アーユルヴェーダ、ウサダ	○ 学び ○ 祖先から ○ 神から	Campuran （Katakson, Usada）
21	IDA BAGUS MADE BAJRA	● アーユルヴェーダにもとづく ● 糖尿病に対応	● 薬	○：アーユルヴェーダ	○ 学び ○ 祖先から ○ 神から	Usada
22	NI WAYAN SUK-RINI	● 宝石を入れた聖水と、ココナツオイルだけを使う	● 宝石を入れた水 ● ココナツ、ココナツオイル	×	× 学び × 祖先から ○ 神から	Campuran （Katakson, Kapican）
23	I KETUT PURNA	● 治療は神に祈念するだけ	● 証としての宝石	×	× 学び ○ 祖先から ○ 神から	Campuran （Katakson, Kapican）

24	I KETUT SUDIANA	● 「8」の形の宝石を指輪として利用する ● 自らの内にある超自然力と聖水を用いて治療を行う	● 聖水 ● 宝石	×	○ 学び × 祖先から ○ 神から	Campuran (Katakson, Kapican)
25	LUH TAMA	● 神からもらったピンク色の宝石により、水の色がピンク色になる ● 見えない友人が108人いる	● 宝石 ● ピンク色になった水	×	× 学び ○ 祖先から ○ 神から	Campuran (Katakson, Kapican)
26	I WAYAN KORTAY-ASA	● 第六感が強く、過去と未来が見える ● パスラマンを開設	● 超自然力	×	× 学び × 祖先から ○ 神から	Katakson
27	WISTAWAN	● 一般書や専門書の知識を元に、家の庭に薬用の植物を栽培	● 聖水 ● 呪文	×	○ 学び ○ 祖先から ○ 神から	Katakson
28	JERO MANGKU GEDE KISWARA	● Jimbaran（観光地）に住んでおり、患者の多くはその周辺の人びと	● 薬	×	△ 学び ○ 祖先から △ 神から	Katakson

出典：アンケート調査から筆者らが作成

み認識されており、診療に用いられるわけではなかった。事例18におけるレラジャハン（護符）も物であるが、あくまで、神からレラジャハンを描く能力を得ていると解釈できる点で、バリアン・カタクソンであるといえる。

これらからバリアンの類型を考える場合、バリアンとしての正当性の根拠と、診療手法そのものを区別する必要があるといえよう。バリアン・カタクソンの場合、バリアンになる直前の超常現象と原因不明の病気、社会的混乱の経験が正当性を示すひとつの証となるが、これらの特徴は本インタビュー調査でもしばしば聞かれるところであった。それだけでなく、上述したように短剣や宝石を得るという経験についても、それが超常的なものとして語られる場合、バリアン・カピチャンではなくカタクソンに分類できることになる。

次に、植物の使用について見ていきたい。植物からオイルや薬をつくる場合、その知識を神から得る（事例9、10、16、22）、祖先から伝承もしくは人から聞く（事例11、28）、古文書や文献に依拠する（事例4、5、8、13、17、19、20、21）という場合がある。ここでも、その知識をどのように得たかという点で類型化が可能であり、神から得た場合はバリアン・カタクソン、それ以外の場合はバリアン・ウサダとなる。以上から、物や道具との関わりにおいては多様で捉えどころがないように見えながらも、N・ナラ（Nala 1993）の4類型が一定の説明力をもつことが明らかとなった。

他方で、植物をより道具的に使用するケースもみられた。事例2（赤い玉ねぎを貼る）、3（モリンガで叩く）、15（山椒の実をあてがう）があてはまる。そのいずれもが神から知識を得ているという点で、バリアン・カタクソンであるといえる。さらに、道具的な用法の意味について説明しようとする場合、ここでもN・ナラ（Nala 1993）の議論が有効である。

それらについて、神やバリアンのエネルギー（タンバ）を、植物を媒介として患者に伝えている（スラナ）と解釈すれば、宝石（事例22、24、25）と同様の役割を果たしていると考えられる。さらに言えば、上述の薬の例もまた、神の知識をもとにする場合も、古文書に依拠する場合も、神や自然の諸力を薬というかたちで媒介させ、患者に伝えているということができる。

以上から、道具や植物の使用方法、診断の手法やその道具は様々であるが、第一に、その物、技術、知識がどのように得られるかに着目することで、分類が成り立つことが実証された。第二に、タンバ（エネルギー）とス

ラナ（伝達）という形式こそが、その内容の多様さ如何によらず、バリアンの技量・技術のより本質的なものであると解釈することができる。そのため、バリアンとは、超常現象・超自然力の使い手というのみならず、様々なエネルギー、知恵、知識の媒介者、あるいはそれらを媒介するための技術をもちあわせる者、という点にいっそう着目すべきであろう。

6. 議論と展望

事例17と21は、神や祖先からの能力ではなく、古文書や文献をとおして自主的に学んだ知識や技術を用いており、類型としてはバリアン・ウサダに分類される。事例21は、バリ島の伝統的呪医というよりも、インドのアーユルヴェーダの医師に近い。

事例17の場合、治療をしたり薬を処方するのではなく、相談にのりアドバイスをするというように、伝統的なバリアンがもつ多様な役割の一部分のみを引き受けており、他のバリアンとは異なる特徴をもつ。バリアンになったきっかけについても、神に選ばれたり、祖先からの義務であったりというような抗い難いものではなく、バリ島文化に関心があるというような個人的な趣向性が影響している点で、他の事例とは異なる。先行研究に従ってバリアンを超自然力と結びつけるのであれば、この事例はバリアンではないことになる。しかし、知識を媒介して伝えるという役割、その知識の源泉をロンタル（古文書）にもつという点では、なおバリアンであるといえる。

最後に、この事例を敷衍して、ロンタル（古文書）の読み書きとバリアンとしての正当性について、ヨーガの観点から論じておきたい。N・プラスティカ（Prastika 2017）は、ヨーガの経典である『ヨーガ・スートラ』（Yoga Sutra、バリ島では「ヨーガ・サストラ」Yoga Sastra）とバリアンに深い繋がりがあることについて論じ、バリアンは『ヨーガ・スートラ』とその知識・技法を実践的に使用すべきことを提案している。バリアン（特にバリアン・ウサダ）は、診療という現場を離れると、ロンタルを読み、書き写したり、執筆したりすることがある。N・プラスティカ（Prastika 2017）によれば、バリアンのそのような行為はヨーガ・サストラ（Yoga Sastra）の一部とされ[13]、スピリチュアリズムの実践、すべての知的能力と直感的な資質の鍛錬でもある。ロンタルの執筆や書写しを通して、規則的で明瞭かつ純粋な呼吸リズムが現れ、そのリズムを感じることでロンタルの執筆はより意義深いものとなるという[14]。以上のように、バリアンの技量には古典的なヨーガの思想・技術の影響が垣間見える。バリアンとヨーガのより詳細な関係については、稿を改めて論じることとしたい。

同様に、本稿で扱うことができなかったものとして、バリアンの患者側の視点・特徴をあげることができる。患者における伝統医療と近代医療の意味づけについて、筆者らは、バリアンのもとを訪れる患者に対するアンケート調査を2018年に実施しており、その結果の提示と詳細な分析については別稿を準備している。

参考文献

Brigitta, Hauser-Schäublin, I WayanArdika, 2008, *Burials, Texts and Rituals Ethnoarchaeological Investigations in North Bali*, Indonesia, LIT-Verlag.

Connor, Linda, 1982, “The Unbounded Self : Balinese Therapy in Theory and Practice”, Anthony J. Marsella, Geoffrey M. White eds., *Cultural Conceptions of Mental Health and Therapy*, D. Reidel Publishing Company, 251–267.

Csordas TJ., 1988, “Elements of charismatic persuasion and healing”, *Medical Anthropological Quarterly*, 2, 121–42.

Eiseman Jr., Fred B., 1989, *Bali : Sekala and Niskala : Essays on Religion, Ritual, and Art*, Tuttle Publishing.

Gureje O, Nortje G, Makanjuola V, Oladeji BD, Seedat S, Jen kins R., 2015, “The role of global traditional and complementary systems of medicine in the treatment of mental health disorders”, *Lancet Psychiatry*, 2, 168–77.

菱山宏輔，2017,『地域セキュリティの社会学―バリ島の近隣住民組織と多元的共同性』，御茶の水書房.

菱山宏輔・加藤禎久，2020,「地域開発における伝統的緑地（テラジャカン）の役割―バリ島プンリプラン観光村の事例」『人間科学論集社会学篇』，10（2）, 35–42.

Hobart, Ann, 1997, *The People of Bali*, London : Blackwell.

Kato, Sadahisa and Kosuke Hishiyama, Anak Agung Ketut-Darmadi, Dewa Ngurah Suprapta, 2017, “Changing Roles of Traditional Small Urban Green Spaces（Telajakan）in Bali, Indonesia”, *Open Journal of Ecology*, 7, 1–11.

————, 2019, “Functional Analysis of Telajakan Plants and Space in Northern Denpasar, Bali, Indonesia”, *Open Journal of Ecology*, 9, 15–24.

Kirmayer LJ., 2004, “The cultural diversity of healing : meaning, metaphor and mechanism”, *Br Med Bull*, 69, 33–48.

Kurihara T, Kato M, Reverger R, Tirta IGR., 2006, “Pathway to psychiatric care in Bali”, *Psychiatry Clin Neurosci*, 60, 204–10.

Lemelson, Robert Bush, 2004, “Traditional Healing and Its Discontents : Efficacy and Traditional Therapies of Neurophsychiatric Disorders in Bali” *Medical Antropology Quarterly*, 18（1）, 48–76.

Liem, Andrian and Rahmawati, Kuncoro Dewi, 2017, ”The

meaning of complementary, alternative and traditional medicine among the Indonesian psychology community : a pilot study", *Journal of Integrative Medicine*, 15 (4), 288–294.

Miyaura, Rie Tomoko Ohno, Hisayuki Maenaka, Ketut Sumiartha, and Hirofumi Yamaguchi, 2015, "A Particular Silhouette of Human-Influenced Coconut Trees in Hindu Bali, Indonesia : An ethnobotanical field note", *Ethnobotany Research & Applications*, 14, 405–422.

Nala, Ngurah, 1993, *Usada Bali*, Denpasar : Upada Sastra.

Nortje, Gareth, Bibilola Oladeji, Oye Gureje, Soraya Seedat, 2016, "Effectiveness of traditional healers in treating mental disorders : A systematic review", *The Lancet Psychiatry*, 3 (2), 154–170.

Prastika, I Nyoman, 2017, *Yoga Sastra : Laku Mistik Balian Usada di Bali*, Unpublished Theses.

Salan R, Maretzki T., 1983, "Mental health services and traditional healing in Indonesia : are the roles compatible?", *Cultural Medical Psychiatry*, 7, 377–412.

佐保田鶴治，1980，『解説ヨーガ・スートラ』河出版社.

Singh, Ram H., 2010, "Exploring issues in the development of Ayurvedic research methodology", *Journal of Ayurveda & Integrative Medicine*, 1 (2), 91–95.

Suartama, I Ketut, I Wayan Budi Sentana, Ida Bagus Suradarma, 2015, "APLIKASI GAMBAR RERAJAHAN BERBASIS ANDROID DAN WEB SERVICE", Stikom-Bali, *JOSIKOM : Jurnal Online Sistem Komputer*, 1 (1).

Whitten, Anthony J., Tony Whitten, R. S. Soeriaatmadja, Roehayat Emon Soeriaatmadja, Suraya A. Afiff, 1996, *The Ecology of Java and Bali*, Periplus Editions (HK).

Wijayanto, Eco, 2019, "KERIS AS A CULTURE TEXT : HERMENEUTICS REVIEW OF PUSAKA KERIS MAGAZINE", *International Review of Humanities Studies*, 4 (1), 299–312.

注

1）本稿は、共著者であるN・アンガライニが近畿大学総合文化研究科において提出した2018年度修士論文『バリ島における伝統医療の現状―伝統的医師バリアンと「ロンタル・ウサダ・タル・プラマナ」を事例として』の一部をもとに、大幅に加筆修正したものである。

2）バリアンが用いる植物は、自宅の敷地内の庭だけでなく、元来、テラジャカン telajakan と呼ばれる外庭にも植えられてきた。テラジャカンは、バリ島の伝統的家屋敷を囲む壁の外側、道路に面して設置される小さな緑地である。そこには大小様々な植物が植えられ、日々の供物、スパイス、虫除け、生薬など、様々な用途に用いられてきた。道沿いに連なるテラジャカンは天然の日除けを成し、雨水の浸透を促進し、住民同士の交流の場所にもなる。さらに、その風景はバリ島住民のアイデンティティの一部を形成してきた。テラジャカンの所有と管理はテラジャカンが面する家の者によるが、そこで栽培される植物の利用は誰でも可能であるということも特徴のひとつである。テラジャカンの詳細については、Kato and Hishiyama ほか (2017, 2019)、菱山・加藤 (2020) を参照。

3）『ロンタル・ウサダ・タル・プラマナ』(Lontar Usada Taru Pramana) によれば、様々な植物や植物の部分（葉、根など）が熱／冷や中性的な成分を含有する。例えば、イチジクの一種であるオオバイヌビワ (Taru Awar-Awar : Ficus septica) は「熱」(Panes) を含有し、葉は「中性」(Dumalada)、茎は「熱」、樹液は「熱」、根は「冷」である。茎はハチミツと白檀 (Cendana : Santalum album) の抽出液に混ぜこみ、リウマチの飲み薬 (Loloh) として利用することができる (Taru Pramana 2000 : 7)。白檀の抽出液としては、その幹を切り、すりおろすような方法で成分を水に染み出させた物を使用する。

4）クリス (keris) と呼ばれる短剣は、インドネシア全体に見られるものである。刀身は波のようにうねり、文様が浮き出している。柄に石や宝石がはめ込まれており、切るための実用性よりも、芸術的な外見が特徴である（以下、クリスについては Wijayanto 2019を参照)。バリ島のクリスは、マジャパヒト王国に由来すると考えられており、神聖なもの、神の保護、悪霊への抵抗を象徴するものと考えられている。多くのバリ人がその神聖さを保ちながら継承し、保管していることにバリ島におけるクリスの特徴がある。菱山 (2017) によれば、バリ島における宗教的祭礼時に治安維持を担う「プチャラン」と呼ばれる伝統的自警団もまた、クリスを聖なるシンボルとして携行している。

5）『ロンタル・プングン・ティワス』には、ヒンドゥー教の概念に基づき、人間の内にある力、人間の体の中に顕現する神について記されている。そのため、このロンタルの知識をとおして、自分の力で病気を治癒することができるという理解が促される。それだけでなく、『ロンタル・ウサダ』を理解するバリアンとしての義務や役割、治療についても記されている。

6）レラジャハンは、魔術的な意味を帯びた文字と絵によって描かれた護符である。治療のため、黒魔術 (Black Magic) を予防するため等に利用される。司祭やバリアンのみが扱うことができ、レラジャハンを描く際には儀式や呪文が必要である (Suartama et al. 2015)。

7）インタビュー時、マンク氏は脳梗塞の治療中であったため、インタビューは比較的短時間のものとなった。

8）アーユルヴェーダの診断は、二つの側面から成り立つ (Singh 2010)。第一に、患者自身にたいする検診 (rogi pariksha) であり、第二に、病気の診断 (roga pariksha) である。前者が、患者自身の特徴や性質に関するものであり、後者は、病気そのもの、病気の状態についての検査である。

9）バリ島ではココナツを三種類に区別する (Miyaura et al. 2015 : 408–9)。ブンカック／ケルンガー (Bungkak/Kelungah) は木に生ってまだ若く小さい状態のものであり、浄化、飲み薬 (Loloh)、儀式に使用する。クウド (Kuwud) は徐々に熟し緑色になったものであり、ビーチで良く販売

されており、飲むためのココナッツである。最後に、ニュー（Nyuh）は茶色くなり落ちたものであり、オイルを抽出し、料理や儀式に使用するココナッツである。このような3区分はバリ島に特殊なものであり、インドネシア語ではクラパ・ムダ（Kelapa Muda：飲むためのココナッツ）とクラパ・トウア（Kelapa Tua：ココナッツオイルや料理に使用する）という2区分となる。バリ島では、実だけでなく葉も儀式に使用したり、幹は家などを建てるために使用するというように、木の全体を使用できるという点で、ココナッツの木が特別な木と見なされる。それだけでなく、成熟しているココナッツの果実は常に純粋に保たれ、木を育むための水分を保存していることから、ココナッツの果実は、「次の生命を与える」ということを示す。ココナッツの木の幹は、果実が成熟して落ちてしまうまで保つということから、「成熟」を示す。それらは人格哲学である「チャトゥール・アスラマ」（Catur Asrama）という概念に基づく生活に例えられる。チャトゥール・アスラマ（チャトゥールは4つ、アスラマは段階という意味である）とは、解脱 moksa へと向かうヒンドゥー教徒がたどるべき4つの段階である（Brigitta and Ardica 2008 : 125）。それらはブラフマチャリ（Brahmacari：勉強の期間）、グレハスタ（Grehasta：結婚の期間）、ワナプラスタ（Wanaprastha：世俗的なものから少しずつ離れる）、サニャシン（Sanyasin：世俗的なもの完全に離れる）である。それは同時に、出生、保護、死の哲学でもある。果物が生る前から、その果実が保護されるように幹を育てる。人間にも同様のことがあてはまる。ヒンドゥー教において、人間は生まれてから、同時に両親とカンダ・ンパ KandaMpat によって保護されている。ココナッツは古いものだけでなく、小さくて未熟なものも落ちる可能性がある。人生も同様である。死は年をとった人にだけでなく、乳幼児にも若者にもおとずれる可能性がある。

10）チャナン・サリは、神・人間・自然の間の調和やバランスを示す供物の種類である。

11）プジャテイは神にたいする「誠実さ」を表す手段として使用されている供物の種類である。

12）筆者の一人であるN・アンガライニも、インタビューの際にその水を口にした。その時は健康な状態であったため何も影響は現れず、味も普通の水と変わらなかった。しかし、タマ氏のアドバイスによれば、その水を持って帰り、頭が痛くなったり（N・アンガライニは高等学校在学時代からしばしば頭痛に悩まされてきた）、不安を感じたりする時に、イダ・バグス・バジュラ・サンデイとデワ・アユ・マス・ミラー・サリに祈りを奉納してからその水を飲むと良いとのことであった。ある日、重度の頭痛を生じたため、タマ氏のアドバイス通りに水を飲んだところ、一時間以内に頭痛が治った。

13）ヨーガ・スートラの8段階のヨガのうち、2段階目にあたる「勧戒」（Niyamas, ニヤマ）のなかに「読誦」（Swadhyaya, スワディヤーヤ）があり、経典に学ぶ行為もヨガであるとされている（佐保田 1980）。

14）ヨーガ・スートラの8段階のヨガのうち、3段階目が「坐法」（アーサナ, Asana）、4段階目が「呼吸法」（プラーナーヤーマ, pranayama）、5段階目が「制感」（プラティヤハーラ, pratyahara）、6段階目以降は「瞑想」にあたる。ロンタルの執筆という行為が「勧戒」および「坐法」にあたるとすれば、そこから「呼吸法」、さらに「瞑想」に至るとみなすことができる。